京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

Title	漢天師世家批判
Author(s)	宮川
Citation	東洋史研究 (1949), 10(4): 295-324
Issue Date	1949-01-15
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145859
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

Kyoto University

配の機構は崩壞する外は無いからである。そして武帝時代から以後に於いては斯る經濟策を助くるに足る精神的理論が漸次完成された。其れが即ち經學に外ならない。

賈誼新書の思想は其の全領域を通じて基本的には先秦儒家を修正するに至らないが、士人支配の態勢略ぼ確立する時期に相當した爲め、自ら斯る社會的制約の外に獨立するを得なかつたのは當然であつた。然し學問思想に對する政治力の支配が猶ほ決定的關係に迄進まざりしが故に、士人支配の正當性を理論附ける哲學を考へる意識は未だ殆んど現はれてゐない。嚴密な意味に於ける經學は猶ほ成立してゐないのである。經學を經書の解釋學と定義するに止めるならば何れの世にも其の存在は肯定されよう。然し經學を支那の社會史と不可分關係に於いて捉へ其の社會的機能に重點を置いて考へるならば、此の概念を滿足する經學は支那史上常には存在しなかつたと言はなければならない。所謂上部構造が基本的下部構造に對して及ぼす反作用の效力を無視する一方的解釋には與し得ないが、學問や思想を其の發生地盤たる社會其のものと切斷して考へる抽象的立場は無意味である。經學を其の社會性に着目しつつ把握する時、賈誼の思想は若干の共通點を有するに拘らず之を經學時代に置くことは妥當を缺く。ただ彼に於いて經學時代への準備が着着爲されつつあつたことは之を否定するものではない。

漢天師世家批判　道教正一派の道士明の張正常の撰した漢天師世家四卷に、開祖張道陵の世系を記し、上は八代の祖、張良に溯り下は二十四代、北宋初の正隨を經て撰者の時まで連綿つづく家世を傳へてゐる。かつ四代張盛が魏明帝の時、家傳の劍印經錄を携へ、漢中から江西龍虎山に居を移し、爾來この地が正一派本山に定つたといふ記事が多くの道教史家に無批判的に採用されてをり、僅かに傅勤家「中國道教史」が戰亂中江南の吳國領内に移住できまいと疑ひ、張正隨以後を信ずべしと考へてゐるが所說なほ詳しくない。天師世家によると道陵—衡—魯—盛と傳へ、第十代陶の子祥までの間に五代あり、一世代の平均五十年をこえいくら不老不死の本家でも信じ難い。かつ一代おきに當時の君主との交渉を記すのが一層辻褄合はなくする。陳の道教學者馬樞の道學傳に梁の時天師十二代の孫、張裕が江南招眞觀に住むとあるが、彼の學統は父祖代

（八八頁へ續く）

權を堅持し極めて排他的孤立的にして同一種姓に屬する個人はその輿論の代表とも見るべき「長老委員會」に絶對忠實なるを要請せられ、ここに政治的關係に對する種姓的限界あり國家の政治的勢力が實質的には武人階級にのみ依存せる結果、他の種姓の人々が國家的觀念に消極的となるてふ必然的本質を形成せしこと、回教徒侵入時の防禦がラージュプト戰士階級に一任せられありしが如し。同時に、同一種姓に屬する各個人は個々の種姓内に絶對的なる祭神を有し彼等の職業の孤立性と社會的分派性の精神的根據となしあるも、之等神々は根元的には印度萬神の一員として印度文化への歸一を豫定し全體的調和に關聯しあり。各種姓は自己の特權を主張すると共に爾餘の種姓の特權をも尊重して之を犯さず、種姓相互の孤立性が全體的に見て印度の社會組織に對し一の調和を保ちあり、この點よりせば、一種の政治秩序なり、即ち印度社會は文化的に統一體を示すとはいへ、その文化的統一は、内に種姓的分裂を含みしものにして、分裂的傾向を以て社會的發展を遂げたる全體的包攝的調和を示せるてふ複雜なる二重性格を有せるものなり。

著者は之が具體的説明として、この分裂階層的種姓社會の文化的統一を齎せる根本基調たる婆羅門主義的世界をその發生に溯りて考察しその發展の課程に於て佛教・耆那教の如き多くの非婆羅門的要素を印度化して之を包攝することにより絶えず複雜化し分裂化しつつ發展せる印度社會に即應しつつ更生發展せしを述べ、この婆羅門主義的世界の文化統一に對し、人間性解放による世界史的なる民族世界の樹立を唱へし佛教もその社會性を獲得すると共に逆に印度社會内に消滅するの運命を辿れるを指摘し、又印度を支配せし異民族の政治力も、常に之に先行せる強力なる社會的基調たる印度文化に對しては全く消極的受動的存在たりしことを政治史を通して歴述し、回教の理念をこの印度世界に妥協調和せし點にムガール帝國の興隆があり、回教正統派の復興運動が傳統的印度の利益と相反せし點にその衰亡があるを指摘せられたり。最後に、神の前に平等を説く超民族的なる世界性に準據し傳統的なる印度社會組織に强力なる對照をなせる回教世界の近世印度内部に於ける成立が、印度の文化統一を破壞し印度世界分裂の悲劇を生み出せしを説き、この苦惱より、印度教と回教の折衷宗教たるシーク教の如きが生れしも、印度的世界の餘りにも完成されし世界なるが故に、兩文化の高次的統一の困難なるを論ぜられあり。

〔佐藤圭四郎〕

代のものと思はれない。天師世家の教權の確立は北宋以後あるべく世代年數が合理的になるのは唐以後である。道陵の先世については元の趙道一の歴世眞仙體道通鑑に良の子、不疑の長子、典の子孫が政界に活躍し後漢の司空皓、太守綱らを出し、次子高の子孫が宦界に雄飛したとし、道陵の祖父は起、父は大順とするのに天師世家は父を綱、祖父を皓となし、長子の家系を盜んでをり一層信ぜられないものである。（宮川）